

中世の大阪 —水走氏・渡辺党を中心に—

学芸学部 国際英語学科 小西 瑞恵

要旨：中世の大阪地域で活躍した武士団の実像を、河内水走氏と摂津渡辺党・渡辺氏について実証した。中世後期の武士団を検討するという第一の課題については、畿内型武士団としての水走氏や渡辺氏が、南北朝時代には南朝方や北朝方に帰属しながら、室町時代には幕府の守護領国体制に組み込まれていく過程を、あきらかにできた。水走氏と渡辺党を比較するという第二の課題については、畿内型武士団としての特徴に基本的な相違はないが、水走氏は枚岡神社の祀官として江戸時代も中河内の名族としての地位を保ち、渡辺氏は豊臣秀吉の大坂城が築かれた頃、渡辺の地を離れて奈良に去るという違いについて、地域の歴史の違いとして検討を加えた。中世の国家機構を構成する朝廷・官衙や権門寺社と幕府に奉仕したのが、畿内型武士団としての水走氏や渡辺党であった。水走氏や渡辺氏が水軍・武士団として交通や流通機能を担ったことが、中世を通じて活躍した独自の強さの理由であり、また、近世に武士身分として生き残れなかった理由でもある。

キーワード：武士団、水走氏、渡辺党、大江御厨、河俣御厨

はじめに

ここであきらかにしたいのは、中世の摂津・河内を中心に、文献や古文書であとづけることができる武士団の実像である。以前に畿内型武士団として分析した河内水走氏と摂津渡辺党を中心に、あらためてその歴史の変遷を検討し、畿内型武士団とはなにかについて論じることが本論文での課題である。

かつての大阪地域は、現在とは全く異なる地理的条件のもとにあった。河内国の大部分は淀川と大和川が形成する沖積地で、大和川が南河内（藤井寺市付近）で石川と合流し、分流して北上する中河内から北河内地域は、中世になっても河内湖（広見池、のちの深野池と新開池）と低湿地が大半を占め、大和川は河内湖を通じて淀川と摂津難波で合流し、大阪湾と瀬戸内海に注いでいた。そのような地理的景観にあったため、地域的に偏在している史料をできるだけ数多く分析し、大阪地域の全体像が浮かび上がるように努めた。

1 畿内型武士団としての水走氏と渡辺党—学説史と課題—

河内水走氏についての学説史には、林屋辰三郎の西国にみられる典型的な土豪の御家人説、戸田芳実・河音能平の開発領主説、五味文彦の公文級領主（代官的

武士団）説、網野善彦の職人的武士（団）説などがある^①。それぞれ異なる視点にもとづく規定にみえるが、実はいずれの論者も水走氏武士団が畿内的な（あるいは西国的な）特質をもつ事実を前提にして、このような規定をしていると考えられる。

しかし、それぞれの論者は、水走氏が畿内的な特質をもつ事実を認めながら、武士論の規定としては、それを十分に説明し得ていないと思われる。私は「水走氏再論」のなかで、三浦圭一が論じた「中世における畿内の位置—渡辺惣官職を素材として—」や、丹生谷哲一が「鎌倉幕府御家人制研究の一視点—散所御家人を通して—」で論じた、公家（朝家・摂関家および中央官衙等を包括する）に対する奉仕者としての御家人という位置付けを重視しながら、水走氏の畿内型武士団としての歴史について分析をおこなった^②。

その結論は、中下級官人から開発領主へ成長した12世紀前半が水走氏武士団の形成期であり、13世紀半ばにおける水走氏は、大江御厨山本・河俣執当職をもつ皇室領大江御厨の現地管理人として、生駒山麓西部地帯の山本七ヶ郷を中心に支配する長者・御家人として武士団を発達させた、というものであった。このような水走氏武士団の在り方は、平安時代を通じて開発領主として大規模な所領と武士団を形成し、清和源氏を武家の棟梁とする主従関係を通じて鎌倉幕府に組織さ

れていった東国武士団の在り方とはあきらかに異なる。その社会的環境の相違は、畿内近国に特有な、京都を中心に高度に発達した軍事・経済・政治の構造にあると指摘した。

しかしながら、13世紀後半（鎌倉時代後半）から14世紀（南北朝期）の水走氏については、その所領構造が一層多面的な構造を示し、地域的にも拡大していくことを指摘したのみで、室町幕府の支配が安定する応永年間（1394－1428）に、水走氏武士団はむしろ伸び悩む、と述べるにとどまった。

いうまでもなく、武士団や領主制の歴史は、中世社会全般について論じた上で、結論を出さなければならないが、『門真市史 中世編』や「水走氏再論」は、おもに平安・鎌倉時代の水走氏について論じたものであったため、中世後期における水走氏の畿内型武士団としての特質については、分析が及んでいない。本論文で最初に取り上げたいのは、このような視点で分析した、鎌倉時代末から戦国期における水走氏武士団である。幸いにも、今回、中世の水走文書を総て検討する機会をもつことができた^③。水走文書は東大阪市東石切町の千手寺所蔵で、現在は大阪歴史博物館に寄託されている。原本は、一部をのぞいて失われ、すでに流出した文書も数点ある。千手寺所蔵水走文書は江戸時代の写本であるが、一部をのぞいて水走文書の正文（原本）が存在しない今、水走氏についての唯一の直接的な史料である。

本論文で次に取り上げたいのは、摂津の国津であり、皇室領大江御厨にも包括されていた渡辺津（窪津）を本拠として、朝廷・官衙や権門勢家に奉仕した渡辺党の畿内型武士団としての特質と、水走氏との比較検討である。「摂津渡辺党と山城槇島氏・伯氏－中世の武士論についての覚え書き－」^④で述べたように、摂津渡辺党は10世紀の渡辺綱に系譜を引く摂津渡辺党二家（渡辺氏・遠藤氏）に分かれ、三浦圭一が「中世における畿内の位置」で指摘したように、御厨経営・牧との関係・摂津渡辺津を本貫とする水軍・荘園の荘官、といった四つの特徴をもつ。重要な前提なので、内容を要約する。

渡辺党に関する諸系図の系統は多いが、『尊卑分脈』にのせる嵯峨源氏系とするものと、『続群書類従』（第五輯下）に収録する「渡辺系図」の二つに大別され、ともに武勇の人、渡辺綱につながるという共通性を持つのに対し、『続群書類従』（第六輯下）に収められた「遠藤系図」は全く内容を異にしたものであり、渡辺党の内部は鎌倉初期あるいはそれ以前から

すでに実質的に二分されており、承久の乱以降に渡辺党本流に対して遠藤家が実質的に独立し、別の系図を作ったものであるとする。

渡辺党がその特異な一字の名乗りをもって歴史の舞台に登場するのは10世紀で、源満仲の婿^{あつる}敦（宛）とその養子とされる綱^{つな}の時代である。渡辺綱は摂津源氏源頼光（満仲長男）の四天王の一人で、当時都で勢力をふるった鬼同丸を倒した物語で知られる。さらに詳しく渡辺党の出自や動向について検討すると、四つの特徴が認められる。

第一は、御厨経営と関係していたことである。渡辺党は淀川下流域の渡辺近辺を本貫とするが、馬寮や大宰府、さらに権門に属する贅人としての出自をもつ者があり、宇野御厨（長崎県松浦市御厨町付近を中心に、伊万里湾沿岸・北松浦半島・平戸・五島方面の島々の広範囲にわたる地域）に関わった大宰府贅人松永法師（三十六歌仙のひとり源順の子孫か）にみるような広域的な活動を展開していた。

第二に、渡辺党は牧と関係深い。1015年（長和4）に小野宮家領河内国辛島牧（東大阪市玉串町付近、辛島荘）の牧司としてみえる源訪は、渡辺党の一族であろうという。渡辺家・遠藤家の系図から、その官職を一覧すると、当時広くおこなわれていた売官成功のなかで、もっとも成功が多かったという左右馬寮の允や、衛門府・兵衛府に関するものが多く、そのような方法を通じて牧務・牧司となり、馬の私的所有や交易による蓄財を有利にしたうえでの武士団形成が考えられるとした。

第三に、渡辺党は渡辺（窪津）を本貫とし、津・港湾と切り離せず、海陸にわたって極めて機動力に富んだ武士団、水軍として源平争乱期に活躍した。淀川河口近辺の港湾管掌者集団たる性格をもつゆえに、難波のことで渡辺党に関係のないものはなかったとする。

第四に、渡辺党のうちには、荘園の荘官として活躍するものが多い。たとえば、壇ノ浦合戦に活躍した渡辺呢は、これより先の1182年（寿永1）から翌年にかけて、東大寺領山城国玉井荘（京都府綴喜郡井手町）の下司として活躍した。また、肥後国味木荘（熊本県上益城郡御船町）預所であった源憑や、文覚上人および重源上人も渡辺党の出自ではないかという。

このような三浦圭一の研究をうけて、河音能平の「中世前期の大阪」では、渡辺党の惣官職や検非違使、四天王寺執行や坐摩神社長者としての側面が明らかにされた（『新修 大阪市史』、1988年）。それによると、11世紀の院政期、朝廷の御厨子所領の摂津大

乗せて渡辺津を出発したが、義経軍の兵力を構成したのは、おもに摂津渡辺党の水軍であったと思われる（『吾妻鏡』）。

渡辺二家は都の検非違使庁の摂津出先機関として、三国川河口の河尻諸港をはじめとする摂津国の諸港の津頭検察にあたるとともに、権門寺社・公領を問わず摂津国内に検非違使庁役を賦課する主体ともなった。しかし、承久の乱以降には、大阪湾上の海上警察権について、検非違使庁摂津国出張所としての権限は縮小され、六波羅探題の指揮下に渡辺惣官が主としてその任務にあたっていたと考えられる。渡辺惣官職は、鎌倉時代になると、遠藤氏が独占するようになった。遠藤氏は鎌倉幕府に忠実で、有力な西国御家人であった。内蔵寮が御厨子所領を管轄するようになり、13世紀中葉には摂津大江御厨渡辺惣官職も内蔵寮から補任されるようになった。

また、検非違使は単に軍事・警察を掌ったのではなく、ケガレ＝キヨメを管掌したことを、丹生谷哲一は、あきらかにしている（『検非違使』、平凡社、1986年）。大阪の天神祭についても、疫神を難波の海に流した御霊会であり、渡辺党はケガレを祓う任務と無縁だったとは思われない^⑦。

ケガレ＝キヨメを管掌した渡辺党に関して、渡辺の地にあった式内社坐摩神社（座摩神社）の神職を、11世紀末以降渡辺遠藤氏の一族が務めていたことは重要である。坐摩神社は、摂津西成郡唯一の延喜式内社である。「遠藤系図」によると鳥羽上皇の時に滝口の武士であった遠藤為信の子信恒は「座摩^{すけ}祐四人長者」と注記され、文覚の指図で頼朝の挙兵に最初から参加した遠藤家国は「座摩祐四人長者其一人」と注記されている。また、鎌倉時代になると、四天王寺執行に遠藤氏一族がつぎつぎと就いたが、執行職をめぐる一族の内紛が激化した^⑧。1237年（嘉禎3）8月5日、前執行明順に与する悪党100余人が四天王寺に乱入して放火を企てたとき、渡辺惣官がこれを阻止しようとして合戦になり、境内は死骸でいっぱいになったと『百練抄』に記す。渡辺は四天王寺の外港としての位置を占めていたので、渡辺惣官は検非違使としての権限を行使したのである。

渡辺惣官家文書は、1739年（元文4）渡辺惣官家の渡辺久が広橋保教の養子となった際に、系図や古文書等を持参し、広橋家所蔵となった。1692年（元禄5）に徳川光圀の家臣佐々宗淳が南都奈良で調査し、その復命書である『南行雑録』に一部が掲載されている。奈良県吉野郡下市町大字広橋の広橋家で、町史編纂の

人々に発見されたのは1961年で、現在は奈良県文化財に指定されている（『大和下市史 資料編』、1974年）。

2 鎌倉時代末から南北朝期の水走氏と渡辺党

この章では、水走文書に拠りつつ、鎌倉時代末から南北朝期の水走氏武士団について検討する。水走文書の多くは、鎌倉時代・室町時代の譲状（処分状）である。水走氏の所領構造を示すのは、1252年（建長4）6月3日のA藤原（水走）康高譲状とB藤原康高譲渡証文目録で、左衛門尉藤原康高が嫡男忠持に譲った所領所職は、五条屋敷・大江御厨山本河俣両執当職・四ヶ郷惣長者職と四ヶ郷郷務・種々の下司職や公文職・林四所・諸寺俗別当職・平岡社社務職や諸神主職などであった。

1292年（正応5）正月のC藤原忠持処分証文目録では、前常陸介藤原忠持（忠茂）から、嫡男左馬允忠雄へ所領所職等が譲られたが、その内容は1252年（建長4）のA・Bとほとんど変わらない。変化がみえるのは、1325年（正中2）3月5日のD行意（水走忠雄）譲状と、1332年（元弘2）2月20日のE藤原康政処分状で、Dでは、沙弥行意（水走忠雄）が嫡子民部大夫忠連に譲ったところ、不慮にして早世したため、康政を嫡子として譲ると書かれている。さらに、水走里の2町を庶子忠祐に譲り、本年貢段別1斗5升を惣領に納めるべきことを記す。分割相続がなお維持されているものの、庶子は惣領に本年貢を納めねばならなかった。

鎌倉時代後半に社会は大きな転換期を迎え、1324年（正中1）後醍醐天皇の第1回の倒幕計画失敗（正中の変）後も幕府の政治は安定せず、天皇はふたたび日野俊基らと幕府討滅を謀った。1331年（元弘1）4月、吉田定房が幕府に密告し、日野俊基・文観・円観らが逮捕され、鎌倉に護送された。これが元弘の変である。8月、後醍醐天皇は皇居を脱出して南都に逃れ、さらに笠置寺に入り、近隣の武士の応援を求めた。9月、笠置寺を幕府の大軍が包囲したため、笠置城は陥落し、後醍醐天皇は脱出して逃れる途中逮捕され、翌1332年（元弘2）3月、隠岐島に配流された。

Eが記されたのは、元弘の変が勃発して内乱状態にあった時で、武家（幕府・六波羅探題）の催促により、水走康政も出陣を迫られていた。Eには、戦場に打ち向かい、余命を知らないため、嫡男宝寿丸に所領所職を永代に譲ることと、次男登々丸にも別の譲状を書き与えるから、相互にこの趣旨を守り、相違なく領

知進退するように、と記されている。

Eと同じ1332年（元弘2）2月20日に記されたFの水走康政讓状は、水走康政が次男登々丸（のちの忠夏）に処分した所職・名田・山林・下人等の讓状である。なかでも、「下人等」13人の名が記されたことが注目される。のちの忠夏の讓状（後述するJ）には、「所従等」16人と各々子孫等についての、より詳しい記載があり、水走氏武士団の武力構成がわかる貴重な史料となっている。

新しくみえる水走氏の所領所職としては、「五条郷公文職同郷務」、「草賀郷半長者職同郷務」、「殖槻観音寺別当職」等がある。五条郷には、もともと水走氏の広大な9棟の屋敷があった。「日下」「孔舎衛」「草香」については、『日本書紀』よりみえるが、「草賀郷」^⑨という表記は、Fが初見である。殖（植）槻観音寺は、鎌倉時代後半から南北朝時代にかけて水走氏が別当職についていた。花園山殖（植）槻観音寺（東大阪市西石切町2丁目）の本尊は阿弥陀如来であり、平野大念仏寺（大阪市平野区）の末寺という。境内に尼妙阿追善のための石造十三重塔（現在は十一重）があり、1294年（永仁2）4月8日に母親の尼妙阿のために孝子等が造立した供養塔であることが彫られている。これは別当職をもつ水走氏の一族であると推測されている。

1333年（元弘3）5月、鎌倉幕府は滅亡し、後醍醐天皇による建武政権が成立したが、1335年（建武2）冬に足利尊氏が離反すると政権は瓦解し、1336年（建武3）湊川の合戦で楠木正成が戦死した後、足利尊氏は光明天皇（持明院統）を擁立し、建武式目を制定して武家政権を開いた。後醍醐天皇は11月に吉野に逃れ、以後1392年（明德3）の南北朝の合一まで動乱が続いた。

1354年（正平9）8月27日のG源憲康以下連署状は、水走下野守忠名が急病で1353年（正平8）年8月2日に死去したため、忠名跡の所職・名田・所従・山林等を、舎弟藤原忠夏に譲ることを一族が認め連署したものである。忠名は讓状を書き与えなかったが、忠夏に譲るという遺言を残したという。ただし、忠名が死去した後、藤原多門丸（忠直）が生まれたため、忠名跡について忠夏は一期分の相続で、忠夏は多門丸を実子同様に撫育し、忠名跡分を譲り与えるようにと記している。連署した10名の水走氏一族は、藤原姓と源姓から成る。正平は南朝の年号で後村上天皇、北朝では文和3年で後光厳天皇の代である。この頃水走氏一族は南朝方に属していた。しかし、1360年（延文

5）7月頃の『太平記』（巻35南方蜂起事付畠山関東下向事）には、河内守護畠山国清の守護代杉原周防入道が誉田城を落ちて水走ノ城に楠籠もったが、楠（楠木正儀）の大軍に攻められて南都の方へ落ちて行ったとある。一族のすべてが南朝方であったとは考えられないのである。

元の水走文書には、1369年（正平24）5月24日と、1381年（弘和元）12月17日の「長慶天皇綸旨」があり、いずれも式部丞水走忠直に宛てて、「河内国玉櫛庄内松高・貞久両名」と「父忠名跡」の知行を認めている。玉櫛（串）庄は河内郡にあった摂関家領・平等院領の荘園で、1305年（嘉元3）頃の年貢が750石という大規模な所領であった（東大阪市玉櫛元町付近）。この2通の「長慶天皇綸旨」によって、水走氏は南朝方に属したと考えられてきた。後村上天皇没後の1368年（正平23）、南朝の皇位を継承した長慶天皇は、北朝方への妥協をいっさい認めぬ強硬派であった。密かに和平交渉をおこなってきた楠木正儀は北朝方に走り、1369年（応安2・正平24）に河内守護に就いた。水走忠直に宛てた2通の「長慶天皇綸旨」は、南朝方が軍事的に不振で、楠木正儀が北朝方に帰属した時期に出されていることを考慮すべきである。

果たして、1383年（永徳3）4月19日には、H高重持（茂）安堵状と、I畠山基国安堵状が出され、水走刑部大輔水走忠夏が親父水走康政跡の相続を安堵されている。Iは、1382年（永徳2）河内守護となった畠山基国が、刑部大輔水走忠夏に親父康政跡の相続を認めて安堵した判物である。すでに、1382年（永徳2）3月5日の「畠山基国判物写」（畠山基国軍勢催促状写）が、壺井八幡及通法寺文書にある（『羽曳野市史』第4巻）。基国は、元の河内守護であった畠山国清の弟義深の子である。基国の郎等としては、伯父国清の頃と同様、遊佐・神保・斎藤らが活躍し、河内守護代は遊佐河内守国長（長護）であった。HはIと同時に出されたもので、貼紙に「高階大和守従五位下源重茂」とある。重茂は師重（師行兄）の子で、高師直・師泰の弟にあたる。高重茂は1352年（文和元）に大高重成とともに引付頭人になっている。足利氏に仕え執事も務めた高氏であるが、尊氏と弟直義が戦った観応の擾乱の際、1352年（観応2）2月、直義側に敗れ、高師直・師泰をはじめ一族主流の多くが摂津武庫川辺（西宮市）で滅ぼされた。高重茂や大高重成は、むしろ一族で傍系であったため、生き残った^⑩。

高重茂は、駿河守・大和守になり、たびたび引付頭人を務めた実務型官僚であったから、1347年（貞和

3) から1353年(文和2)まで高師泰・師直・師秀の一族が河内守護を務めた実績もあり、河内守護畠山基国の安堵状を出すのに関与したと考えられる。

1384年(至徳元)8月22日のJ水走忠夏譲与目録と、同年11月のK水走忠夏譲状は、河内守護畠山基国によって安堵された水走氏の所領所職の内容を示す。水走忠夏から嫡男新判官忠武に宛てた譲状で、次男忠光以下へも譲状を書いたという。とくに、Jは忠夏が嫡男忠武に譲り与えた屋敷・所領所職・名田・山林・荒野ならびに所従以下の目録である。これまでの譲状や目録になかった項目で重要なのは、切川城である。切川は東大阪市の地名で、喜里川と書かれ、恩智川中流右岸に位置する。水走氏関係の城としては、水走系図にみえる「平(枚)岡城」や、1360年(延文5)7月頃の『太平記』(巻35南方蜂起事付畠山関東下向事)にみえる「水走ノ城」があるが、関連は不明である。

所領所職のなかでは、供御助成名がみえるが、大江御厨の供御を貢納するための用途に充てられた免田である。また、河俣御厨執当給は、1252年(建長4)の譲状から水走氏が代々世襲してきた大江御厨山本・河俣執当職のうち、河俣執当職が河俣御厨の給分として記されたものである。「河俣御厨執当給 同真垣名并舜見跡悉」とあるから、河俣御厨内の真垣名と舜見の旧跡も所有していた。

1333年(元弘3)5月の「内蔵寮領等目録」(宮内庁書陵部所蔵文書)によると、「河内国河俣御厨三千疋五月分」「河内国大江御厨田代二百余町」「同御厨摂津国渡部被補惣任料百五十貫文」「同御厨内津村郷」とある。河内国大江御厨領として200余町があり、大江御厨摂津国渡辺惣任官職に渡辺党が任料150貫文で任命された。また、御厨子所に供御人を出した荘園として「河内国大江御厨」がみえ、「河俣御厨」は大江御厨から独立して「御服月料国」として5月に3,000疋(銭30貫文)を賦課されていた。

1346年(貞和2)11月、四条隆宗のあと山科のりとし教言が内蔵頭に就任し、南北朝期に山科家が内蔵頭を世襲した。内蔵頭は御厨子所別当を兼帯していたから、山科家は朝廷の供御と節会の酒肴等の調進を職務とする御厨子所の長官となり、内蔵寮領と御厨子所の得金を管理できることになった。山科家は室町期には楽所別当に任じられ、また内蔵寮から御服を調進したことから、縫殿寮などの形式化・衰退に伴って成立した御服所をも支配することとなった。

山科家は1405年(応永12)9月には、天王寺寺僧良

譽を河俣御厨の代官としたが、1407年(応永14)の記事によれば、代官請料(任料)は7貫500文で、節ごとに若餅・粽・蓮葉・盆供米等を進納し、人夫を上洛させるものであった。河俣執当職は、1416年(応永23)3月のL水走長忠本領惣領職当知行分注進状にも記される。河俣御厨内の真垣名や舜見跡を、水走氏が支配し続けたかどうかは不明だが、Lの当知行分に記載がないし、Lと同時に出了されたM水走長忠本領惣領職不知知行分注進状によると、「河俣御厨惣追捕使職」が「はすみ方知行」であったから、水走氏の手を離れたものかと思われる^⑩。

新しくみえる項目としては、「氷野河浮津」がある。氷野は大東市に位置し、鎌倉時代の譲状には、「氷野河并広見池、細江等」と記されていた。水走氏は北河内においても、水利権・漁業権・水上交通権などをもっていたが、その拠点としての氷野河沿いの津(渡場・船着場・港)と考えられる。

新しくみえる所職としての林燈油公文職は、河内郡にあった石清水八幡宮寺領「林燈油園」で、水走氏が公文職を相伝したものである。美乃勅旨田(下司職・同職事給)は、若江郡・河内郡の勅旨田で、1228年(安貞2)年8月の「修明門院(後鳥羽後室)処分状」に初めてみえる。正平12年(1357)、後村上天皇は当勅旨田を花園六郎左衛門に宛行った。下司職と荘官としての職事給は、水走氏に与えられていた。ほかに、居館の周辺部に広がる付属田地で、直営地として年貢・公事が免除され、居館とならんで領主支配の拠点となった門田(佃)も存在していた。また、下人源次郎の出身地を示す「菱江 若江郡之村」の菱江は若江郡に属した。1704年(宝永1)の大和川付替えまでは、長瀬川と玉櫛川が大和川の一大支流であった。玉櫛川は八尾市二俣で長瀬川と分かれ、北北西に流れ、東大阪市英田地区付近でさらに分流し、東を吉田川、西を菱江川といった。この分岐する地区を、菱江(村)と呼んだ。吉田川は北流して深野池に入り、さらに新開池を経て再び菱江川と合流し、東大阪市森河内で長瀬川に注いでいた。

これまで検討したように、河内水走氏は鎌倉時代末から南北朝の動乱期を通して、南朝や北朝に帰属して生き残り、室町幕府の守護領国体制に従うことになった。

次に検討するのは、摂津渡辺党である。1333年(元弘3)に、摂津渡辺党が任料150貫文で、大江御厨惣任官職に任命されたことは前述した。1333年(元弘3)1月19日、天王寺の合戦で六波羅の軍勢を破った楠木

正成は、敵を追撃して渡辺で兵糧米を押し取ったが、当地の渡辺孫六なる者が参戦していた（「楠木合戦注文」）。南北朝期の渡辺党については、1337年（延元2）8月5日の「後醍醐天皇綸旨」によると、摂津難波庄（西成郡、大阪市内）地頭職が勲功の賞として源（渡辺）照に宛行われた（以下、「渡辺惣官家文書」による）。住吉神社の神主津守氏や天王寺僧らと結んで忠勤を励んだ戦功であろうという。1341年（興国2・暦応4）6月14日の「後村上天皇綸旨」は、渡辺照に越中国上津見保（富山県東砺波郡城端上見付近）を勲功の賞として与えているが、宛所は「竜（滝）口蔵人館」になっている。「渡辺系図」には、渡辺照は後醍醐天皇の滝口蔵人で、1348年（貞和4）河州風森合戦で討死したとみえる。この系図によれば、難波庄とその南方にあった木津浦との境争論を渡辺惣官照法師が訴えた問題について、天王寺宮（別当宮親王）に宛てて出された「後村上天皇綸旨案」が、追筆により、1369年（正平24）9月26日とされるのは、年代的に検討の必要がある。後村上天皇は1368年（正平23）3月11日に住吉の行宮で没している。

1366年（正平21）12月30日の楠木正儀の安堵状は、渡辺左馬允（娯）に和泉国和田郷（堺市南部）を与えた。後の1371年（応安4）5月28日の「楠木正儀安堵状」（楠木正儀国宣）は、渡辺四郎左衛門尉に当所の堀屋敷と良阿跡を知行するよう命じているから、四天王寺僧でもあったという渡辺惣官照法師以来の所領を渡辺娯に安堵したものである。同年7月20日と1374年（応安7）にも、正儀は渡辺四郎左衛門尉に「渡辺筑後守斎跡」の知行を安堵している。1401年（応永8）12月20日の摂津守護代某打渡状には、「摂津国河南西成郡難波地頭屋敷壹町捌段大廿四歩」とあり、渡辺左近将監強は1町8反264歩の広さをもつ堀に囲まれた地頭屋敷を難波庄（大阪市）内に有し、根拠地としていた。

南北朝期の渡辺惣官家文書19通は、2通の「後醍醐天皇綸旨」、8通の「後村上天皇綸旨」および、6通の「楠木正儀国宣」等からなり、渡辺党が南朝方に属したことを示す。ただし、楠木正儀が南北両朝の和平交渉に際して斡旋に努めて失敗し、管領細川頼之の求めに応じて幕府方に走った1369年（正平24・応安2）から、ふたたび南朝方に転じた1382年（弘和2・永徳2）閏1月までは、北朝に属した。摂河泉に南朝方武将として勢力を張り、幕府から河内・和泉守護に任じられた楠木正儀の指揮に従ったのである。1377年（永和3）12月、石清水八幡宮大山崎神人等の權益を守る

ため、堺北庄住民等助五郎・持円・寺宝等の荏胡麻売買停止を命じた摂津住吉郡守護楠木正儀の奉行人橘正伸の書下状は、正儀の守護代渡辺薩摩入道に宛てられ、渡辺薩摩入道から住吉郡奉行（住吉郡担当の守護使）渡辺四郎兵衛尉に宛てられている（「離宮八幡宮文書」）。ふたりは渡辺惣官家の一族だと考える。

楠木正儀は、1382年（永徳2）閏1月、河内平尾（堺市美原区）の戦いで、和泉守護山名氏清に大敗する。1382年（弘和2）2月14日の「楠木正儀国宣」は、渡辺左近将監強に父渡辺娯跡の相続知行を安堵している。渡辺氏も楠木正儀に従って南朝に帰順したのである。「渡辺系図」には、渡辺強は1392年（明德3）正月18日に、楠木正儀と共に河内守護畠山基国と千早城で戦い、楠木氏と共に南山に逃亡し、9月南山から入洛したという。また、大内義弘に従って將軍義満に謁見し、1401年（応永8）に難波を給わったと記されているが、一応の参考になる。

大内義弘は1392年（明德3）から1399年（応永6）まで大和宇陀郡守護や紀伊守護、和泉守護に就いて南朝方を攻撃し、堺に居館を持っていたから、摂津渡辺氏との交渉が生じて不思議ではないが、渡辺惣官家文書には、筒井順興に宛てて出された「大内義興書状」が含まれるだけで、時代が降る。楠木正儀の没年については、1386年（元中3）4月19日の淡輪長重への知行安堵状が残っている（京都大学文学部所蔵、淡輪文書¹²）から、1392年頃までのいずれかの時点で没したものであると思われる。大内義弘は長門・周防・豊前・石見に紀伊・和泉を加えた6国の守護を務め、最強の守護大名になったが、將軍義満の挑発にのって、1399年に反乱をおこして堺で敗死した（応永の乱）。

摂津国では、1397年（応永4）摂津守護細川頼元（兄頼之の養子）の卒去にともない、嫡子満元が摂津守護職を継承し、1398年（応永5）から1420年（応永27）までの守護代は長塩備前入道であった。

1401年（応永8）12月20日の「細川氏被官某打渡状」（摂津守護代某打渡状）によると、渡辺左近将監強は摂津守護細川満元の命をうけた細川重以（重八か）から、摂津国河南西成郡難波地頭屋敷を安堵され、幕府の支配に服した。

3 室町・戦国時代の水走氏と渡辺氏

室町時代の水走氏の所領所職を示すのは、1416年（応永23）3月のL水走長忠本領惣領職当知行分注進状と、M水走長忠本領惣領職不知知行分注進状である。LとMは、同年3月28日のN私市忠宗以下連署状と

一連のものとして出されている。Nは同年3月の水走長忠本領分についての当知行分を記したLと、不知行分の注進状Mについて、近隣の国人6人が相違ないことを請文として連署し、保証したものである。これによって、彼ら国人達が連帯した行動をとっていたことがわかり、国人一揆とされてきた。国人一揆とは、国人領主間の地縁的結合組織であり、成員間の平等を基礎にした契約的關係で結ばれ、事の理非を決定する際に、多数決制を採用していたことなどに共通の性格を認めることができるとされる。このような国人一揆に、Lは該当するかどうかを次に考えたい。

連署しているのは、私市次郎三郎忠宗・辻孫二郎忠世・若松九郎長興・向弥二郎兼直・長尾太郎左衛門入道行通・小山民部入道行憲の6人である。以下、6人について検討する。

私市は室町期から戦国期にみえる地名で、河内国交野郡のうちである。地名は私部市の略で、交野市の天野川右岸に位置する。当地に勢力を張った国人領主として、私部の北に館城を築いて住んだ安見氏がいる。安見氏は南朝方に属して活躍したが、北朝方に転じ、畠山氏の配下に属した（「安見家系譜」）。私市次郎三郎忠宗と安見氏との関係は不明であるが、安見氏の影響力を無視できない立場にあったと推測される。私市氏が拠ったと思われる地域だけではなく、後述するように、Mにみえる「はすみ方」が「やすみ方」である可能性が大きいからである。

辻（辻之）は南北朝期からみえる地名で、和泉国大鳥郡若松荘のうちにある。1376年（永和2）正月に中村の宮座に新入した者として、「辻 治部次郎」がみえ、1387年（至徳4）と1397年（応永4）に宮座の神事頭役を務めている（『堺市史 続編4』）。若松は若松荘と考えられ、現在の堺市に位置した和泉国大鳥郡の荘園として、鎌倉時代末から史料にみえる。鎌倉幕府御家人若松氏、戦国期上神（にわ）氏の拠点である。若松九郎長興は、御家人若松氏一族と考えられる。

向（向井）氏については、南北朝期から戦国期に向井村がみえ、和泉国大鳥郡（堺市）に位置した。向井氏の史料は多く、堺の商人として、また堺近辺の土豪として度々史料にみえる。松原市に位置する向井も、地名として戦国期からみえる。

長尾氏は河内守護畠山氏の小守護代として、大町氏とともにみえる。小山は戦国期からみえる地名で、河内国志紀郡・丹北郡のうち、藤井寺市に位置する。1484年（文明16）6月24日の「室町幕府政所賦銘引

付」に、小山は朝日孫左衛門尉時長の知行地で代官を置いていたが、その代官の1人として「小山」がみえる（『室町幕府引付史料集成』上）。

6人が拠点にする地域を、「大阪府下の中世街道地図」によって検討すると、東高野街道・奈良街道から長尾街道（竹内街道）、西高野街道にわたり、和泉守護所が置かれた堺へも通じている。従来考えられてきた東高野街道沿いの国人連合というには、あまりにも広域的である。

1416年（応永23）3月28日のNの宛所は書かれていないが、文面からみて、河内守護畠山氏と守護代の支配系統に宛てられたものではないか、という仮説を提起する。その理由は、後の小守護代長尾氏が6人のなかに入っているからである。当時の河内守護は畠山満家、守護代は遊佐国盛であり、その被官人菱木盛阿は錦郡郡小守護代を務め、茨田郡郡代は渡辺源六であった。

小守護代とは、又守護代ともいい、守護代の配下に属し、命令を受けて従う国人である。1457年（長禄元）10月25日の「河内守護代遊佐国助判物（折紙）」を例にとると、この折紙は河内守護畠山義就の命をうけて、守護代遊佐国助が造内裏段銭を観心寺領について免除したもので、その宛所として、「大町越前入道・長尾三郎左衛門尉・中村与三郎助通」がみえる。同年11月23日の「中村助通遵行状」があり、守護・守護代の命令は実行されている（『観心寺文書』160・161）。今谷明は、守護代遊佐氏が遊佐長護（国長）以来在京が原則であったらしいことから、在国守護代とでもいうべき内衆の存在が必要であったと考えられるとし、小守護代はいずれも同格で、数郡を分担して領国経営に当たっていたのではないかと推定している¹³。

史料Mの水走氏の不知行分によると、これまで水走氏が支配した所領所職を知行しているのは、「はすみ方」（「やすみ方」か¹⁴）や「大町方」、また「領家山本方」である。このうち、「大町方」は、長尾氏と同様に小守護代としてみえる。小守護代大町氏が水走長忠本領惣領職のうち、「南松武領下司職」と「（河内郡市場村）玉櫛庄内松高名」を知行しているため、水走氏の不知行分とされているのである。また、「はすみ方」（やすみ方）が、水走氏の「河内郡有福名」・「母木寺領本免公文職」・「円教寺下司半職」・若江郡の「河俣御厨惣追補使職」・「供御職事給」を知行しているため、15世紀の水走氏は室町幕府の守護領国体制のもとに組み込まれ、中下級官人から開発領主・長者として発展を遂げてきた所領所職の中核部分につ

いての支配権を失っていった。河内守護畠山氏の領国支配機構に組み込まれ、河内郡や若江郡について、郡代や小守護代が水走氏の上に位置する体制に変化していったと考える。

また、当知行分については、河内国河内郡の散在田畠諸職・若江郡の河俣御厨執当職・茨田郡の水野河浮津などであり、「河内郡内七ヶ郷内寺社山林荒野用水管領」や、河内郡の水走庄同今福野が水走氏の本拠地における領主権の存続を示している。支配の実態を知る史料を持たないが、史料Nは水走氏が畠山氏の領国支配機構に組み込まれながら、近隣の国人領主との契約にもとづく連帯関係を通じて、従来の領主権を確保しようとしたことを示している、というのが私の結論である。

水走氏で注目されるのは、東寺領備中国新見荘（岡山県新見市）に、水走氏が登場することである。1401年（応永8）と翌年の史料に、領家方代官として活躍する水速殿（安富因幡入道）と甥の平岡殿がみえる（『備中国新見庄史料』131、『教王護国寺文書』巻3）。荘園の荘官を務める者が多いという畿内型武士団の特徴を示す事実であるが、細川氏との被官関係が認められるのである。細川京兆家の有力内衆安富氏と水走氏の結びつきについては、後考に俟ちたいが、1354年（正平9）12月3日、河内郡にあった醍醐寺領郡荘（東大阪市）の下司職半分をめぐって、山城五郎左衛門尉忠澄と争った土豪として、「安富四郎左衛門尉盛基」がみえるのが、水走氏と安富氏との結びつきを示唆する最初の史料である（成簀堂文庫蔵「楠木正儀安堵状」。『布施市史』第1巻、1962年）。

再び摂津渡辺党・渡辺氏について検討する。畠山基国が河内に入国した初期段階で最も顕著な活動するのは、草部・菱木氏である。両氏は共に本来和泉国出身であったと考えられ、草部が北河内の小守護代、菱木は南河内の小守護代であった。草部・菱木は和泉国大鳥郡（堺市）にあり、南北に接した地域である¹⁵。河内守護畠山基国（1351-1406）の嫡男畠山満家（1372-1433）は、1408年（応永15）以降、紀伊・河内・越中、および大和宇智郡の分郡守護を務め、晩年には山城守護にもなった。彼は2度管領に就任し、將軍義持・義量を補佐した。畠山満家の守護代は遊佐左衛門尉国盛（徳盛、法名・道号久叟）であったが、茨田郡の郡代を務めたのは渡辺源六で、小守護代は菱木盛阿であった。茨田郡は河内国北部に位置し、郡域は現在では枚方市の西南部、寝屋川市の西半、守口市・門真市の全域、大東市の西部、大阪市鶴見区の東部にあた

る。この渡辺源六は、1401年（応永8）12月20日、摂津守護細川満元から難波地頭屋敷を安堵された渡辺左近将監強の一族だと考える。

一族の渡辺孫三郎は細川晴元に重用された三好神五郎宗三（政長）らとも結んでいっただろう。この後、渡辺孫三郎は河内出身で三好氏奉行人の多羅尾常陸介（綱知）から橋嶋や往生院の地を給せられたこともあった。橋嶋は旧大和川水系の本流長瀬川の左岸から、西方を流れる平野川（河内・摂津両国境界）にかけての地域である。室町時代には、摂津郡のほぼ全域をよぶ地名であったとみられる。室町幕府の御料所となり、1428年（正長1）、畠山満家が、「御料所河内国橋嶋」と十七箇所（守口市）の代官職を与えられている（『満濟准后日記』同年7月19日条）。守護畠山氏が河内の権門寺社を集めた法会を開いたのは橋嶋正覚寺で、当地は宗教的・軍事的・経済的に最も重要な地域であり、畠山氏内衆の有力者神保氏は正覚寺に館をもっていた。1493年（明応2年）の正覚寺合戦で、管領畠山政長が自刃し、正覚寺も炎上して今はない。往生院は往生院六万寺（東大阪市）と考えられ、南北朝期には南朝方の城塞となり、応仁の乱でも城塞として利用され、1477年（文明9）10月9日、畠山義就勢に攻め落とされた（『大乘院寺社雑事記』）。橋嶋や往生院を給せられたことは、渡辺孫三郎が細川氏の内衆三好氏から、どれほど重視されていたかを示している。

渡辺氏は三好長慶（1523-64）の家臣になり、所領を安堵されている。1550年（天文19）後5月21日、三好長慶は渡辺所々散在の名主百姓中に、渡辺千満方本知龍安寺分について早々と指出を調進するように命じ、委細は千満に申しつけるとした。「渡辺系図」によれば、渡辺種（与左衛門）のことで、三好宗三（政長）が（天文18年6月江口で）討ち死にしたあと身を隠していたが、三好長慶が渡辺惣領として尋ねだし、本知（本領）を給わったと記すのは、史料と符合する。また、三好長慶は渡辺孫三郎に「津村竜安寺領御公用」について、毎年軍用米3石を運上するよう命じている。渡辺氏の所領は、難波荘・渡辺荘・津村郷に及んだと思われる。1549年（天文18）、三好長慶は將軍足利義輝を追放し、1552年（天文21）に管領細川晴元を退け、畿内・四国を支配した。後に家臣の松永弾正久秀に実権を奪われ、河内飯盛山城（四条畷市）で病死するのは、1564年（永禄7）7月4日である。

翌1565年（永禄8）11月11日の「瓦林長親・金山長信連署書状」は、渡辺与左衛門と池永左京亮入道に、

所々散在年貢諸成物等について、半分ずつ双方へ納めるよう渡辺荘名主百姓中に命じた。瓦林（河原林）氏は、摂津越水城（西宮市）を本拠とした国人領主であったが、1531年（享禄4）以降、越水城に三好長慶が入城し、1553年（天文22）摂津芥川城（高槻市）に移るまで本拠とした。渡辺与左衛門は種の子と思われる渡辺吉で、池永左京亮は15世紀に遣明貿易で貿易商として巨富を貯えた堺の豪商湯川宣阿の一族である。宣阿の嗣子湯川新兵衛が池永入道とよばれ、1564年（永禄7）に池永修理と推測される堺の豪商が、同じく堺の貿易商人で天王寺屋財閥ともいえる津田宗及の茶会に出席している（『天王寺屋会記』）。

1496年（明応5）に蓮如が摂津石山に一寺を建立し、隠居所としたのにはじまる石山本願寺は、1532年（天文1）から1580年（天正8）まで浄土真宗の本山として勢力をふるった。1570年（元亀1）、織田信長から銭5,000貫と大坂退去を要求されたことにはじまる11年間の石山戦争については、「水走系図」に、1574年（天正2）9月、石黒左近の讒言により、平岡神社宮司水走左近有忠は信長の怒りをかい、信長は大軍をさしむけて枚岡城や有忠の屋敷を焼き、有忠は大和の筒井に去ったという記載がある。

また、「渡辺系図」には、渡辺与左衛門吉が三好義継とともに本願寺に属し、1573年（天正1）11月に信長と戦って敗死したが、その子孫三郎則が信長に召され、本知を給わり、渡辺惣官家を全うしたという。これらの事実については、史料的に確認することができない。1582年（天正10）に豊臣秀吉が政権を握った頃、渡辺満は奈良に去ったという。筒井順慶の子筒井伊賀守定次が1591年（天正13）に伊賀上野城主になったのに従ったともいうが、確実な史料があるわけではない。しかし、1583年（天正11）の大坂城建設が、地元の渡辺氏に大きな変動をもたらしたことは間違いないと思われる。

1602年（慶長7）11月、豊臣秀頼は枚岡神社の修造をおこない、三の鳥居前の禊川にかけた木造の行合橋に銅製の擬宝珠を寄進した。奉行は桑山市右衛門尉重正であった。翌年11月にも、秀頼は銅製鍍金の見事な釣り燈籠を奉納している。秀頼は関ヶ原の戦い後、摂津・河内・和泉65万石の大坂城主という一大名になったが、この1603年（慶長8）4月に内大臣に任じられ、6月には徳川秀忠の娘千姫を夫人として迎えている。おそらく豊臣家の末永い繁栄を祈ったものであろう。

江戸時代の水走氏は、枚岡神社の社務職を相続する

祀官として朝廷より官位を叙せられ、河内の名族としての地位を守ったが、明治政府の宗教政策に疎外されて地元を離れた。

おわりに

中世の大阪地域で活躍した武士団の実像を、河内水走氏と摂津渡辺党・渡辺氏について実証してきた。中世後期の武士団について検討を加えるという第一の課題については、畿内型武士団としての水走氏や渡辺氏が、南北朝時代には南朝方や北朝方に帰属しながら、室町時代には幕府の守護領国体制に組み込まれていく過程を、あきらかにすることができた。しかし、摂河泉の地域は京都を中心とする首都圏であるから、幕府の守護領国体制に組み込まれていったという結論では説明しきれない問題が残る。それは、中世の国家機構や交通・流通支配体系をめぐる問題である。室町時代には、検非違使庁を中心としてきた京都における警察権や商工業支配等の市政権が、室町幕府の侍所に掌握されていくとされる。淀川水系や瀬戸内海を例に考えてみても、各所に朝廷・官衙や権門寺社の関が数多く設置されていた。このような中世の国家機構を構成する朝廷・官衙や権門寺社と幕府に奉仕したのが、畿内型武士団としての水走氏や渡辺党であった。水走氏や渡辺氏が水軍・武士団として交通や流通機能を担ったことが、中世を通じて活躍した独自の強さの理由であり、また、近世に武士身分として生き残れなかった理由でもある。水走氏と渡辺氏を比較した場合、畿内型武士団としての特徴に大きな相違はなく、その本拠とした地域の違いが、江戸時代の生き方や立場の相違になったと考察できる。

（2010年9月30日成稿）

注

- ① 学説史には、次のものがある。林屋辰三郎「鎌倉政権の歴史的展望」（『古代国家の解体』、東京大学出版会、1955年、のちに日本史論聚三『変革の道程』、岩波書店、1988年）、戸田芳実「中世の布施地方」（『布施市史』第1巻第4章）・「中世の封建領主制」（『岩波講座日本歴史 中世2』、1963年）・「在地領主制の形成過程」（『日本領主制成立史の研究』、岩波書店、1967年）・「御厨と在地領主」（木村武夫編『日本史の研究』、ミネルヴァ書房、1970年）、五味文彦「守護地頭制の展開と武士団」（『岩波講座日本歴史中世1』、1975年）、伊東邦彦「中世河内国水走氏の領主支配について」（『東京都立工業高等専門学校研究報告書』11号、

- 1975年)、河音能平『中世封建社会の首都と農村』(東京大学出版会、1984年)、網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』(岩波書店、1984年)・『朝日百科日本の歴史1 中世1 源氏と平氏』、『朝日百科別冊 歴史の読み方2 都市と景観の読み方』(1986・88年)。
- ② 小西瑞恵『門真市史』第2巻(1992年)・「水走氏再論－畿内型武士団の特質と構造－」(『中世都市共同体の研究』、思文閣出版、2000年)。三浦圭一『中世民衆生活史の研究』、思文閣出版、1981年。
丹生谷哲一『日本中世の身分と社会』、塙書房、1993年。
- ③ 2010年度春期公開授業「中世大阪の古文書を読む」で、5回にわたって水走文書を解説した。
『枚岡市史』第3巻、史料編(一)、1966年。
- ④ 『大阪樟蔭女子大学論集』第42号、2005年。
- ⑤ 永島福太郎「渡辺惣官と渡辺・難波」、大阪文化研究所編『上方文化』創刊号、1961年。
- ⑥ 「大江御厨執行職」について、丹生谷哲一は大江御厨執当職と同一とする。その違いは、大江御厨執行職と大江御厨山本・河俣両執当職という記載にあると私は考える。水走氏を大江御厨の「現地」管理人とする戸田芳実以来の説は、実に正鵠を得たものであった。
- ⑦ 『天神祭一火と水の都市祭礼一』、2001年、思文閣出版。
- ⑧ 戸田芳実「御厨と在地領主」(木村武雄編『日本史の研究』、1970年、ミネルヴァ書房。のちに、戸田芳実『初期中世社会史の研究』、1991年、東京大学出版会)。
- ⑨ 源平争乱期の草香党については、小西『中世都市共同体の研究』、272-273頁参照。1441年(永享13)正月、將軍義教の勘気を蒙り、河内・紀伊・越中守護を罷免され、河内に下向した畠山持国の忠実な側近としてみえる草賀中務入道智照(草賀国宗)は、東大阪市日下出身の武士と考えられる。小谷利明『畿内戦国期守護と地域社会』(清文堂、2003年)89頁参照。
- ⑩ 森茂暁『太平記の群像』(角川書店、1991年)169頁参照。
- ⑪ 『山科家来記』によれば、河俣御厨は1460年(寛正1)からは守護の成敗地となり、1471年(文明3)には、三浦三郎左衛門尉との半済(年貢の半分を武士に与える)に対して、山科家雑掌が訴状を出している。この訴訟の経過はわからないが、1480年(文明12)には、山科家の不知行となっている。1472年(文明4)8月の「河俣御厨荘早田内検取帳」(成實堂文庫蔵)を検討することができなかったため、再検討の機会を俟ちたい。『布施市史』第1巻、514頁参照。
- ⑫ 『阪南町史』下巻、1977年。
- ⑬ 今谷明『守護領国支配機構の研究』、法政大学出版局、1986年。
- ⑭ 『言継卿記』に、安見氏を「八隅」と記載する例から、誤記かと考える。
- ⑮ 小谷利明『畿内戦国期守護と地域社会』(清文堂、2003年)164頁参照。

付記：本論文は、阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット(HSNネット)「公開講座フェスタ2010」における公開講座「中世の大阪」(11月10日、さいかくホール)のために執筆したものである。

Osaka in the Medieval Times—Focusing on the Mizuhaya family and the Watanabe family

Osaka Shoin Women's University Faculty of Liberal Arts Department of English as an International Language

Mizue KONISHI

Abstract

summary : The purpose of this article is to study a real image of the warriors in Osaka in the medieval times. First, I examine how the warriors played a historical part and survived in the latter term of medieval times. The Mizuhaya family and the Watanabe family were under both political powers in Nanbokuchō Period, but after all, they belonged to the local powers of Shugo in Muromachi Bakufu. Another is a comparative study of the Mizuhaya family and the Watanabe family. Both warriors were the same type of the Kinai district as metropolitan area. The Mizuhaya family was the shinto priest of the Hiraoka Shrine and celebrated in the early modern ages. The Watanabe family went away to Nara while Toyotomi Hideyoshi built the Osaka Castle. The difference of their results is caused by the historical surroundings of their native places. They fulfilled the transport function of the medieval state, and they survived in the Middle Ages. This is also the reason why they could not survive as samurai in the early modern ages.

Keywords: warriors, the Mizuhaya family, the Watanabe family, Oenomikuriya, Kawamatanomikuriya